

豊かな学びの場 “つちのいえ”の森にみた時の流れ

徳岡駒子(現代生物学 2009-2018年度 非常勤講師)

“つちのいえ” 周辺は白樫 [しらかし]の森になっている。大きな白樫の下には若い白樫がいくつも成長して、森の奥深くまで茂っている。落ちたどんぐりが、自然に成長して森となったようだ。一方、東西にのびる遊歩道の脇には、日なたで勢いよく伸びる唐楓 [とうかえで]、榎 [えのき]、野薔薇 [のいばら]、葛 [くず]、藤 [ふじ]などが光を争っていた。これら植物は、鳥や風によって運ばれてきた種子が発芽したのだろう。

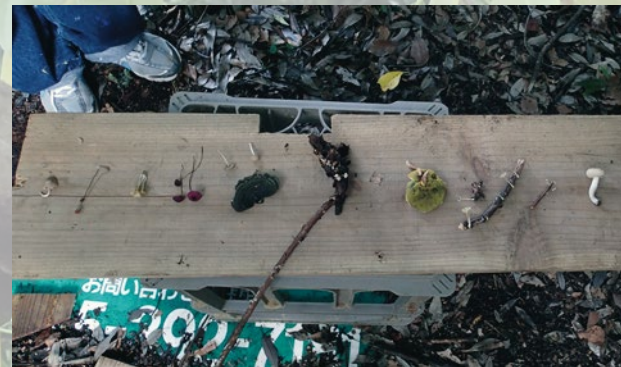
雨季の“つちのいえ”の森では、落ち葉や枯れ枝から小～中型のきのこがたくさん発生した。特に2015年の植物観察会では、学生が予想を超えて多種類のきのこを集めてきたことに驚いた。

同年初夏、比較的若い1本の白樫がツリーテラスの制作のために剪定された。その3年後、古い大木の白樫が台風21号で根元から倒れたが、テラスの白樫はきれいに残った。自然の森は、弱った木が台風などの影響のため倒れて更新する。この森は、自然の影響だけではなく、学習活動を目的とした人為的な活動によっても、変化してゆく。その歴史を記録するには短すぎる期間となったことが残念だ。

変化する森がつくる複雑な環境には、空間それぞれに適応した生物が入り込む。剪定や踏みつけなどの人為もまた、大きな自然の森では生物の多様性をつくる。この多様な環境によって、学生の様々な視点と気づきが担保され、作品に個性をもたらす。一方で、身近な自然を活用するには協力者や教材などの準備に時間がかかる場合が多い。このプロジェクトで印象的なことは、インターネットによって人と情報が容易に繋がり、かつては難しかった豊かな学びが身近になってきたことだ。

専門分野：自然環境教育・菌類（きのこ）生態学

当プロジェクト参加テーマ：植物観察会「植生地理学から読み解く丘の現状」2015年



植物観察会
2015年7月9日



2018年の台風21号で根こそぎ倒れた白樫